

巻頭言



人生 100 年時代における補綴歯科の使命 The mission of prosthodontics in the era of 100-year lifespan

東京医科歯科大学大学院
医歯学総合研究科高齢者歯科学分野 水口俊介
Shunsuke Minakuchi, DDS, PhD

人生 100 年時代と言われるようになり、確かに自分の周囲でも 90 歳以上でも元気に見えるお年寄りをよく見かけるようになった。ひと昔前とは状況が違ってきているように思えるが、これからの時代における補綴歯科の役割は大変重要である。令和 4 年歯科疾患実態調査において 8020 達成者（80 歳以上で 20 本以上の残存歯を有する者）の割合は 51.6% であった。この数値だけ見ると、歯が多く残っている高齢者が増え、日本の歯科医療の勝利、歯科治療や義歯の必要性は減少しているというイメージに捉えられやすい。しかしながら我が国の高齢化は着実に進行しているため、これらの減少をパーセンテージだけで表すのは全く片手落ちであろう。実際 8020 非達成者は 1999 年で 85% で 718 万人だったのが 2016 年には 54% で 911 万人という報告があり、割合は大きく減少しているが実数は 200 万人増加しているという報告もある。これらの人々の中で歯科医療の管理のもとに置かれている人は補綴処置を受けているだろうし、まあ問題ないと思われるが、管理下に置かれていない人に対してどのようにするかが問題である。解答はすぐには出せないが、対応は準備しておかなければならない。

同調査において若年者の齲蝕所有率は減少しているが、高齢者の齲蝕所有率は増加していることが強調されている。これらの齲蝕は根面齲蝕であり、長い時間と費用、そして技術と精魂を込めた長大な補綴装置が崩壊した経験をもつ会員も多いと思う。しかしながら口腔リテラシーの低下した高齢者に、エナメル質より高い pH で脱灰する象牙質の齲蝕をプラークコントロールだけで防御するのは困難でありフッ素の助力が必要である。現在 1500 ppm までのフッ素化合物含有の歯磨剤の販売は認められるようになった。また健康保険の中で 3 か月に 1 度のフッ素塗布は可能であるが、日々用いる歯磨剤のフッ素濃度を上げることが重要と考えられ、海外のように 5000 ppm 含有の歯磨剤の発売を期待している。これには乗り越えがたい障壁があるようなので、当面は日々の 1500 ppm と 3 か月に 1 度のフッ素塗布を組み合わせた管理法の開発が望まれるし、補綴装置のメンテナンスにも積極的に取り入れるべきであろう。

歯科訪問診療の現場では、上記の根面齲蝕により補綴装置が崩壊し、残根だらけになった口腔を見ることが極めて多い。抜歯ができればいいのだが、身体的社会的問題により残根上義歯となっている口腔によく遭遇する。また在宅の患者の中には姿勢の保持や正常な口腔運動ができない患者も多くいる。このような口腔に対して適切な咬合や機能を回復する考え方や手法、あるいは適切なマテリアルを開発・提供するのも補綴歯科の使命ではないかとも考える。つまり、補綴の原則を堅持したうえで目の前の患者に応じた治療法を、補綴を専門としない歯科医師や学生に提供することも肝要であろう。

一方、同実態調査ではインプラント補綴物を装着している人は 70 歳以上の約 6% となっている。インプラントを装着している高齢者においては、埋入した医院に通院することができない、パーツのメーカー型番の確認が

できないなどの問題や、口腔衛生管理が低下することによるインプラント周囲炎などの問題が生じる。パーセンテージはわずかだが、8020非達成者と同様に実数は徐々に増加してゆく。インプラント治療のメンテナンスは埋入した歯科医師の責任ということで保険診療の範囲外となっているため、結局患者とその対処をする歯科医師にはデメリットとなる。何らかの条件を設定し、メンテナンスや偶発症の対処の保険収載を考えるべきである。このように高齢者のインプラントというところにマイナス面が強調されるのだが、「先生、ここここにインプラントが入っているから、入れ歯入れなくてもなんでもかめるよ。」というお年寄りは結構いらっしゃる。根面齧蝕にもならず、きれいにしていれば歯周病にもならないインプラントは機能を保持する最強の方法であると、ある面では言える。インプラントオーバーデンチャーも含めて、予知性をもったインプラント補綴と良好な管理は超高齢者にとって信頼できるアイテムである。今後学会間で協力し、インプラントに関する保険診療体制やインプラントの管理の教育を整備することが必須である。

つつい、老年に偏った巻頭言を書いてしまったことをご容赦願いたい。ただ今後、補綴歯科に期待される事項はますます増えていくと思われるし、それに対応するだけの能力は本会には備わっている。ますますのご活躍を祈念いたします。